

第 55 回インナー大会・プレゼンテーション部門
企画シート

所属	立教 大学 関 ゼミナール	
チーム名	plus α	
テーマ	食品ロス削減への意識改革 ～環境教育×ミミズコンポスト～	
連絡先① (代表者)	代表者名	吉山隼司
	電話 自宅：	_____
	携帯：	_____
	アドレス 携帯：	_____
	P C：	_____
連絡先② (副代表者)	副代表者名	山守陵司
	電話 自宅：	_____
	携帯：	_____
	アドレス 携帯：	_____
	P C：	_____
参加者氏名	荒谷星 太田美帆 上條沙恵 萬田瑠理子	
	(合計人数) 6 名	
使用機材	主催者常備機材	参加者持込(有 <input checked="" type="radio"/> 無 <input type="radio"/>)
	<ul style="list-style-type: none"> ・ PC(PowerPoint 2013) ・ プロジェクター 	

※代表者・副代表者名は参加申し込み時とご変更のないようお願いいたします。やむを得ずご変更される場合は必ずその旨をメールにてご連絡ください。また、補足資料で紙以外のものを使用する場合は、何を使うか、どのように使うかを参加者持込欄に記入をお願いいたします。

※一次予選のみ小規模教室にはマイクは御座いませんが他の教室には常備されております。

企画書

I 概要

私たち立教大学關ゼミナールは食品ロスの存在を知り、まだ食べることのできる食品が大量に廃棄されているということを学んだ。日本は大量の食品を輸入しているのにも拘わらず、その多くをゴミとして排出している。また、独自のアンケートにより、その事実を知らない人が非常に多いということもわかった。私たちはこの状況に危機感を覚え、食品ロスの削減に向けて、1人1人の意識改革を目標に掲げ、「食品ロス削減の意識改革～新・環境教育×ミミズコンポスト～」を提案する。

II 現状分析

・食品ロスの現状

現在、日本では、まだ食べることができるにも関わらず廃棄されてしまう食品の量は642万トンにのぼる。このうち[規格外品・返品・売れ残り・食べ残し]を対象とした事業系食品ロスは331万トンであり、[過剰除去・食べ残し・直接廃棄]を対象とした家庭系食品ロスは311万トンとなっている。

・食品ロス削減の取り組み

食品ロスは発生元が企業と家庭とに分かれているため、対策方法も異なる。企業における取り組みは農林水産省が企画するパイロットプロジェクトをはじめとして関係省庁が先導し行われている。飲食店でも料理の小盛りや食べ残しの罰金制度、持ち帰りの許可等を行っているところが多い。しかし家庭での取り組みは大幅に遅れている。農林水産省では「企業での取り組みは進んでいるが家庭での取り組みは進んでいない」環境省では「企業に対しては削減目標を掲示しているが家庭にはしていない。家庭は自治体に権限を委任している」との言葉が返ってきた。さらに食品ロス削減について取り組んでいる自治体を調査してみても、その数は非常に少ないということがわかった。そこで私たちは家庭における食品ロス削減の取り組みの重要性に注目し、そこに食品ロス削減の意識改革に可能性があると考えた。

・食品ロスに対する意識

521人を対象とした独自のアンケートによると、「食品ロスとはまだ食べることのできる食品が廃棄されてしまうことであると知っていましたか」という問いに対し、知らない、または意味は知らなかったと回答した人は55.5%であり、さらには「日本で食品ロスが年間どの程度あるか知っていますか」に対しては92.3%の人が「知らない」と回答した。最後に「日本人1人あたり1日おにぎり約2個を捨てているという事実に関してどう思いますか」に対しては77.13%が「多いと思う」と回答し、食品ロスについての現状を知れば多いと感じるにも拘わらず、その現状に対する理解が浸透しないからこそ、削減の行動が進まないと考えた。

III プラン提案

私たちは食品ロス削減に向けて、小学生を対象とした「新・環境教育×ミミズコンポスト」を提案する。ここでの新・環境教育とは、「食品ロス削減のための意識改革のための2R教育」と定義する。2Rはリサイクル・リデュースのことである。私たちの目標は出てしまった食品ロスをどう減らすか、また、食品ロスを出さないためにはどうすべきかを子供たちに伝えることである。

・なぜミミズか

生ごみを堆肥化するだけならば様々なコンポストが存在するが、「教育」の面ではミミズコンポストが最も優れていると私たちは考えた。ミミズコンポストは無臭、無音でスペースもとらないため、小学校の敷地内に設置しやすい。電気を必要としないためより環境に優しく、維持費もほとんどかからない。更に、「自然・生き物と触れ

合う”ということは小学校での環境教育では必須な項目であると考えたからである。実際に、文部科学省の環境教育指導要領にもその項目は重要であると記されている。

・実際の流れ

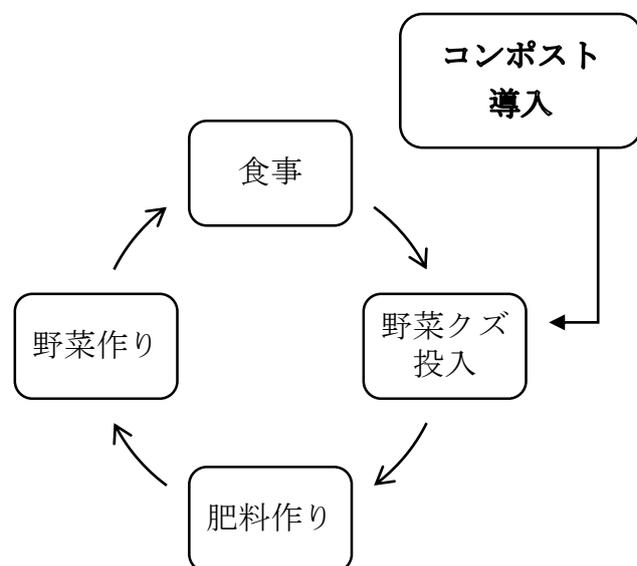


図1 製作者作成

既存のシステムでは、私たちの提案とは違い「教師が環境教育といっても実際何をすればいいのかわからない」、「生徒が環境教育ではなくただ生物を育てるだけで終わってしまう」、「親が子供の環境教育に関わっていない」などの問題点があげられる。そこで私たちは、新たに図1のような流れを指導するための教材を作成し導入することを提案する。学校に設置したミミズコンポストに児童が野菜くずなどを投入する。肥料づくりでは、実際に今までただのごみであったものが自分の手によって肥料となることを体感する。さらに野菜づくりにおいてその肥料を利用する。この段階までで、生ごみの正しい処理の仕方などの、食品ロスを有効に活用する方法、つまりリサイクルについて学ぶことができる。

また、ミミズコンポストの肥料を利用して自分で野菜を育てそれを調理するなどの経験を通して、食べ物を残さず食べることの大切さ、過剰除去の有無などといったリデュースについて学ぶことができる。学習によって生じた調理くずは再びコンポストで利用することで、図1のような循環を体感させることで、より食品ロスについて理解させることができる。新環境教育では、子供たちに食品ロスの問題意識を持たせることで、自らの生活の中で実践できるような2Rを考えさせたい。また、この新環境教育を行う際に家庭を巻き込むことで、子どもだけに留まらず親にまで環境に対する意識を派生させていくことが目標である。

・実現可能性

この提案の要は、子供たちが体験を通して、食品ロス・2Rについて理解することである。現在この制度を導入したいという積極的な意見をもつ小学校もあり、食品ロス削減に取り組む環境省、実際にミミズを飼育している学校からも、このような教材は今までになく、あると良いという意見をいただいている。

・将来展望

この提案が多くの学校で行われることで、食品ロスに対する意識改革を広げることは可能であると私たちは考える。そのためには自分達の作成した教材を日本にさらに広げていくことが大切になる。そこで、教師が教材を求めて集う TOSS などのインターネットサイトに教材を掲載することが目標となる。